

福島と世界の架け橋に

福島大学 マクマイケル・ウィリアムさん

現在の活動：福島を正しく知り、正しく伝える

福島大学で国際交流プログラムを担当しています。講義の他、「福島アンバサダーズプログラム」という海外の学生が福島を正しく知るための、被災地を学ぶツアーを行っています。

また、福島を正しく伝えるための用語研究、通訳ガイドの育成等を行い、県が推奨する「**ホープツーリズム**」※に携わっています。 ※福島のありのままの姿を見て、聞いて、福島から考える旅。



「福島に恩返しをしたい」と語る
マクマイケル・ウィリアム先生



福島ならではの用語が飛び交う
通訳ガイドの研修の様子

活動のきっかけ：“情報災害”が許せなかった

カナダ人の父と日本人の母の間に生まれ、幼いころから日本と海外の架け橋になりたいと思っていました。福島大学の国際交流センターの立ち上げに携わっていた頃、大学内で震災を経験しました。

海外では「福島市で原子炉が爆発した」や「福島全体がゴーストタウン」などの誤った情報が大量に流れ、人々が懸命に暮らしている福島に対して、誤解されることが許せませんでした。大学に情報はあったため、震災や放射能情報を翻訳して発信しながら、被災地の現状を直接知る「福島アンバサダーズプログラム」を震災1年後から始めました。

活動を通じて思う：「何を」ではなく「誰が」伝えるか

福島アンバサダーズプログラムでは、直接地域を見て、地元の方から話を聞くことで、当時の様子や復興への歩みを肌で感じ取ってもらおうようにしています。そのためにも今後も福島の方が被災地を案内・説明できることが重要だと思いますし、福島でのガイド育成は欠かせません。

様々な人にお会いし、参加者たちは福島への誤解を解く以上に「コミュニティ」や「エネルギー」等多くのテーマを学び取っています。福島が抱える課題と希望、光と影の両方を見ることは、今後の世界を考える学びにつながっています。



「ホープツーリズム」の中で地域を直接見て、地元の方の話を聞く様子



「福島アンバサダーズプログラム」に来た学生は、福島を応援するTシャツを購入するようになっているそう。

今後の活動：被災地ためになる交流を、日本全体で

2020年には復興五輪を控え、福島情報を海外へ伝えるチャンスが迫っています。「福島って今どうなの？」の問いは全国の方が聞かれることだと思うので、応援のためにも、日本全体が福島を正しく理解してほしいと思います。

福島の復興を学びに来る人も増えると思いますが、ただ人が来るのでは無く地域に「還元」できる仕組み作りが必要です。募金やボランティア以上に、来ることそのものが被災地の応援になるよう、たとえば代金の一部が地元NPOに還元されるなどの工夫が必要だと思います。